

子どもの経済システム理解の発達 (3)

— 子どもの小売業理解の発達調査 —

福田 正 弘*

(平成 8 年10月31日受理)

The Development of Children's Understanding of Economic System
— An Investigation of Children's Understanding of Retail Trade —

Masahiro FUKUDA*

(Received October 31, 1996)

1. 研究目的

本研究は、我が国の子ども（小学校2～5年生）が、身近な経済システムである小売業に対する理解をどのように発達させているか、その発達状況を探るものである。

現在我が国では、小売業に関する直接の学習は、小学校第3学年の「商店街」の単元で行われている。通常そこでは、子どもたちは実際に身近な地域の商店街を観察し、商品をより多く販売するための小売店の工夫や努力、消費者の買い物の工夫を学習する。しかし、この学習では、これら以外にも、商品の生産から小売に至る様々な事実に知識（経済用語や事実情報など）や、経済システムの構造を客観的に説明する構造的知識（仕入価格と販売価格の差としての利益概念）、日常的に経験する様々な商品の価格変動を説明する概念的知識（価格概念）なども学習しているはずである。むしろ、こうした知識を前提として初めて小売店の工夫や努力が経済活動として説明可能なものとなるのではなかろうか。

ところで、これまで子どもの小売業理解の発達に関する研究は、主として心理学者が行ってきた。それらの研究を総覧すると、交換手段としてのお金の機能、商品の意味、財による価格の違い、交換の意味、店主と店員の雇用関係、仕入価格と販売価格の差としての利益概念が調査内容として取り上げられている（福田、1996, pp. 32-33）。特に、利益概念の発達については研究関心が高く、子どもが仕入価格と販売価格をいつ分離して捉えられるか、等価交換というルールの中に、利益確保による価格変化をどう統合できるかに関して多くの調査研究がなされている。しかしながら、これらの研究は、日常的な文脈で子どもの小売業理解の発達を調査するものの、経済システムの構造的知識たる利益概念の発達に焦点化される傾向にあり、上記のような社会科学学習の成果を考慮に入れた総合的な

*長崎大学教育学部社会科教育教室

子どもの小売業理解の発達を解明するに至っていない。

そこで、本研究では、上記3種の知識を調査内容として採り上げ、

- ①それぞれの知識の習得状況が学年によってどう変化しているか（発達のか）。
- ②もしそれが発達のならば、どの学年段階で大きな進展が見られるか。
- ③3種の知識の発達には、相互の関連性が見られるか。

の3点を明らかにし、その結果に基づいて、子どもの小売業理解の発達の特徴を抽出すると共に、それに及ぼす社会科学学習の影響についても考察してみたい。

2 先行研究と研究仮説

これまで、社会科の学習内容を視野に入れて、子どもの小売業理解の発達を総合的に調査する研究は目下のところ見当たらない。現在、子どもの経済理解ないしは経済システム理解に関する実証的研究は、構造的知識の発達に関する研究と概念的知識の発達に関する研究に大別される。

前者の研究では、上述したように心理学者による研究が活発で、Furth, Baur and Smith(1976), Furth(1978, 1980), Ng(1983), Jahoda(1979, 1983), Berti, Bombi and DeBeni(1986a, 1986b), Berti and Bombi(1988), Berti(1992) など非常に多くの研究がなされている。これらの研究は、基本的に、子どもに小売業者（生産者）が仕入価格（生産コスト）に比べてどれだけの価格で商品を販売するか（より安くか、同じか、より高くか）を問い、子どもの中で、利益確保による価格の上昇が等価交換という原則の中にどう統合されるかを見るところに特徴がある。その研究成果に従えば、小売業者が仕入価格よりも高い価格で商品を販売することは、子どもには理解しがたいことのようなのだ。その理由は、

- ①より低学年児童にとっては、交換は単なる儀式であって、価格決定は恣意的になされるという前経済的理解による。
- ②論理数学的能力の発達が見られる中学年児童にとっては、数的一致でのみ全てが決定されるとする一面的な合理的理解（従って、店主の生計費や店員への賃金払いの財源が考慮されない部分的システム理解）による。

からである。そのため、子どもは、等価交換という約束の中で、価格を上げることは不道徳だというのである。このような一面的な合理的理解を脱し、等価交換の原則の中に利益確保による価格変化を統合できるのは、論理数学的能力の発達する小学校高学年（11歳前後）とされている。

本研究では、これら心理学的研究の研究方法与研究成果を踏まえ、同じような質問内容を組み入れ、その反応状況の変化を明らかにしてみたい。但し、商品の価格＝仕入価格（生産コスト）＋利益といった等式は当然社会科の学習内容であるので、発達状況は心理学的研究のそれよりも早くなると期待される。

次に、後者の概念的知識に関する研究については、アメリカの Schug(1983), Schug and Birkey(1985), Kourilsky(1973, 1977), Kourilsky and Graff(1985) やそれらの研究を参考に我が国の小学校低学年児童（第1～3学年）を対象に調査を実施した福田(1993)などの研究がある。それらは実在としての経済制度の説明を求めるのではなく、個人の経済的意思決定において、希少性、機会費用、価格といった経済概念の習得状況を見るものである。これらの研究では、小学校低学年期から、子どもは高い達成率で経済概念を習得

してしていることが明らかにされている。

本研究では、価格決定問題に絞って概念的知識の発達状況を明らかにしてみたい。これまでの研究成果から、その習得状況は低学年より高いものが予想されるが、社会科学習の影響により学年進行によって一段と進展するものと期待される。

なお、事実に知識に関しては参考すべき先行研究が見当たらなかったため、本研究では独自に調査項目を設定することにする。事実に知識は、事実との直接的な接触によって形成されるが、その発達は意図的な学習によって促進されるであろう。従って、この知識の発達は、社会科学習の有無によって大きく差が出るものと期待される。

また、一般的に事実に知識、構造的知識、概念的知識は、この順で形成的関係にあると考えられている。つまり、それらは後者ほどより抽象的となっており、前者を前提にして形成されるというのである。もしそうであれば、これら3者の習得状況の間には、高い相関が見られることになる。しかし、上述の先行研究で明らかにされている構造的知識と概念的知識の発達状況の相違からすれば、この考えは否定されてしまう。そこで、本研究では、これら3つの知識間の相関関係を明らかにし、この考えの真偽を確かめてみたい。

3. 研究方法

3.1 調査内容と調査問題

上記3つの知識を調査内容とするため、以下のような質問項目を設定した。

事実に知識…経済活動を理解する上での基本的知識や情報を問う。

経済用語（原料・生産・価格）〔問1 (1)~(3)〕

宣伝の内容〔問1 (4)〕

店の立地〔問1 (5)〕

構造的知識…小売業者（生産者）が仕入価格（生産コスト）に比べてどれだけの価格で商品を販売するか（より安くか、同じか、より高くか）を問う。

製品の価格〔問2 (1)〕

原料の価格〔問2 (2)〕

利益込みの価格〔問2 (3)〕

概念的知識…需要量や供給量の変化が見込まれる状況で、小売業者（子ども自身）が価格を上げるか、下げるかを問う。

需要の変化（増加）〔問3 (2)、(4)、(5)、(9)〕

（減少）〔問3 (1)、(3)〕

供給の変化（増加）〔問3 (7)、(10)〕

（減少）〔問3 (6)、(8)〕

また、調査問題は、子どもが出来るだけ具体的文脈の中で思考できるよう配慮した。そのため、アームストロング（佐和隆光訳）「レモンをお金にかえる方法」（1982年、河出書房新社）を参考に、ジェニーという女の子が、レモンと水からレモネードを作って売るというストーリーの中で質問を展開していった。（巻末資料1参照）。

3.2 調査方法

調査は、質問紙法に依った。これは、これまでの先行研究の多くが個人面接によるイン

レビューを採っているのとは異なる。その理由は、調査対象児童数が多いことと、上記の調査問題でも十分調査目的を達成できると考えたからである。

調査は、1996年2月、長崎市の4つの公立小学校の協力を得て行われた。第3学年の「商店街」の学習は、既に終えた後であった。調査対象児童の学年及びその数は以下の通りである。

表1 調査対象児童数

	2年	3年	4年	5年	(人) 合計
男子	89	95	102	88	374
女子	97	88	86	99	370
不明	0	0	0	1	1
合計	186	183	188	188	745

3.3 分析方法

3.3.1 分析1 (各質問項目に対する反応状況とその学年変移の分析)

それぞれの質問項目に対する反応を学年毎に集計し、反応数と共にその出現頻度を百分率で算定した。そして、カイ二乗検定により学年との関連性の有無を分析した。さらに、大きな発達が見られる学年を探るために、隣接学年同士（例えば第2学年と第3学年）の反応データでカイ二乗検定を行った。

また、単純に反応集計の出来ない質問項目については、以下のような手法により集計を行った。

問1 (4)について

自由記述であるため、記述内容に次の内容が含まれているかどうかによって集計した。

「品名」…レモネード、レモンジュース等の品名が記述されているかどうか。

「品質」…おいしい、つめたい等商品の品質について記述されているかどうか。

「価格」…〇〇円、安い等価格について記述されているかどうか。

「メッセージ」…買った買った等販売促進のメッセージが記述されているかどうか。

「店名」…ジェニーの店等販売者ないしは店名が記述されているかどうか。

問2 (3)について

次の分類で集計した。

50円以下…生産コストもしくは利益のみに着目した場合、50円という反応になる。

50～1000円未満…期待する正反応が100円であるため、余裕を持たせてこのランクにした。

1000円以上…殆ど題意を理解していない価格付け。

3.3.2 分析2 (知識群相互の相関の分析)

各知識群の質問項目で代表するものを選択し、その反応を得点化し、知識群毎の合計点を求めた上で、相互の相関係数を算出する。代表項目として選択されたものは以下の通り。

事実に知識…問1(1)~(3)、各1点

構造的知識…問2(1)(2)、正反応2点、50円(40円)とするもの1点。

概念的知識…問3で学年との関係が有意と出たもの、各1点。

4. 結果

4.1 分析1の結果

各質問項目に対する反応状況とその検定結果を示し、それぞれの質問項目に対する反応傾向を述べる。

4.1.1 事実に知識

事実に知識に関する問1の各質問項目に対する反応状況は、表2-1の通りである。

表2-1 問1の反応状況(%)

(経済用語)*					
問番	反応	2年	3年	4年	5年
(1)	1 製品	16.1	14.3	12.2	10.6
	2 原料	72.6	84.1	86.2	88.8
	3 道具	11.3	1.6	1.6	0.5
(2)	1 生産	50.0	66.5	71.3	81.3
	2 消費	19.9	14.8	10.6	5.9
	3 投資	30.1	18.7	18.1	12.8
(3)	1 賃金	36.6	22.5	10.1	5.3
	2 利子	14.5	12.1	4.8	2.1
	3 価格	48.9	65.4	85.1	92.6
(宣伝内容)**					
問番	項目	2年	3年	4年	5年
(4)	「品名」	86.3	94.7	96.1	96.7
	「品質」	56.0	67.3	79.2	83.9
	「価格」	10.9	24.0	24.2	26.1
	「メッセージ」	37.7	38.0	37.1	39.4
	「店名」	10.3	9.9	17.4	18.3
(店の立地)*					
問番	反応	2年	3年	4年	5年
(5)	1 「静かな」	4.3	1.6	2.7	1.6
	2 「お年寄り」	6.5	4.9	4.8	4.3
	3 「家族連れ」	89.2	93.4	92.6	94.1

* 期待する正反応に下線を付した。

** それぞれの項目についての有記述率を記した。

表2-1より、以下の諸点が指摘できる。

- ・経済用語については、三者択一問題ではあるものの、低学年よりかなり高い正反応率を示しているが、特に第3学年での伸びが際立つ。
- ・宣伝内容については、学年が進むに連れて全ての項目の記述率が高まっている。項目別には、「品名」の記述率が低学年より非常に高く、続いて「品質」が高い。しかし、「価格」「店名」については低いままであり、「メッセージ」に至っては学年差は殆どない。
- ・店の立地については、低学年より非常に高い正反応率を示しており、学年差は極めて小さい。子どもは、本調査の質問の程度を既にクリアしていると言える。

次に、問1の各質問項目に対する反応と学年との関連性の分析結果は、表2-2の通りである。

表2-2 問1の反応と学年の関連

質問項目	χ^2	df	判定(p)	有意差が見られる学年(p)
(経済用語)				
(1)	43.60	6	.01	2-3年 (.01)
(2)	44.62	6	.01	2-3年 (.01)
(3)	111.97	6	.01	2-3年 (.01) 3-4年 (.01)
(宣伝内容)				
(4)				
(品名)	20.22	3	.01	2-3年 (.01)
(品質)	41.09	3	.01	2-3年 (.05) 3-4年 (.05)
(価格)	15.46	3	.01	2-3年 (.01)
(メッセージ)	0.23	3	N. S.	
(店名)	8.84	3	.05	3-4年 (.05)
(店の立地)				
(5)	4.85	6	N. S.	

表2-2より、以下の諸点が指摘できる。

- ・経済用語については、学年との強い関連性（有意水準1%）が見られた。また、何れの項目も2-3年の間に大きな差（有意水準1%）が見られた。
- ・宣伝内容については、「品名」「品質」「価格」と「店名」の各項目で学年との強い関連性（前3者は有意水準1%、店名は同5%）が見られた。また隣接学年の比較では、「品名」「品質」「価格」で2-3年の間に有意な差が見られた他、「品質」「店名」では3-4年の間にも有意な差が見られた。
- ・店の立地については、学年との関連は見られず、また隣接学年における有意な差も検出

できなかった。

以上から、本調査で設定した事実に知識のうち経済用語と宣伝内容に関しては、学年による発達が見られ、概ね第3学年で大きく発達しているといえる。

4.1.2 構造的知識

構造的知識に関する問2の各質問項目に対する反応状況は表3-1の通りである。

表3-1 問2の反応状況（%）*

問番	反応	2年	3年	4年	5年
(製品の価格)					
(1)	1「～50」	31.9	27.3	20.7	22.3
	2「50」	49.2	49.7	49.5	45.7
	3「50～」	18.9	23.0	29.8	31.9
(原料の価格)					
(2)	1「～40」	13.4	17.1	25.0	46.8
	2「40」	41.4	35.9	35.6	23.9
	3「40～」	45.2	47.0	39.4	29.3
(利益込みの価格)**					
(3)	「50以下」	47.8	54.9	70.6	83.2
	「50超1000未満」	40.7	41.6	28.9	14.6
	「1000以上」	11.5	3.5	0.5	2.2

* 期待する正反応に下線を付した。

** 反応項目は分類項目。

表3-1より、以下の諸点が指摘できる。

- ・(1)の製品の価格では、50円とする反応が各学年で多く、正反応は低いまま推移している。
- ・(2)の原料の価格では、正反応が第5学年になって急激に増加しているものの、過半数(50%)を超えるには至っていない。
- ・(3)の利益込みの価格では、「50以下」の反応が学年を追って多くなり、逆に正反応は少なくなっている。

次に、問2の各質問項目に対する反応と学年との関連性の分析結果は、表3-2の通りである。

表3-2より、以下の諸点で指摘できる。

- ・製品の価格では、有意水準5%で学年との関連性が見られた。しかし、隣接学年間での有意な差は検出されなかった。
- ・原料の価格では、有意水準1%で学年との関連性が見られた。また、4-5年の間に有意な差(有意水準1%)が見られた。

表3-2 問2の反応と学年の関連

質問項目	χ^2	df	判定(p)	有意差が見られる学年(p)
(製品の価格)				
(1)	13.81	6	.05	
(原料の価格)				
(2)	66.40	6	.01	4-5年 (.01)
(利益込みの価格)				
(3)	79.28	6	.01	2-3年 (.05) 3-4年 (.01) 4-5年 (.01)

・利益込みの価格では、有意水準1%で学年との関連性が見られた。また、隣接学年比較の全てにおいて、有意な差が見られた。しかし、これらは、期待する正反応が学年を追って少なくなるという逆転現象におけるものである。

以上により、本調査で設定した構造的知識は、学年による発達が見られるものの、何れも正反応率は低く、十分な理解に達しているとはいえない。

4.1.3 概念的知識

概念的知識に関する問3の各質問項目に対する反応状況は表4-1の通りである。

表4-1 問3の反応状況(正反応率%)

質問条件/問番	2年	3年	4年	5年	正反応
需要の変化(増加)					
(2)	63.2	65.9	68.8	78.7	上げる
(4)	69.6	76.2	75.8	80.7	〃
(5)	33.0	43.6	53.2	56.1	〃
(9)	38.6	38.1	39.2	43.9	〃
需要の変化(減少)					
(1)	75.8	77.3	78.5	80.7	下げる
(3)	75.1	73.5	74.7	84.0	〃
供給の変化(増加)					
(7)	76.6	80.2	82.9	94.1	下げる
(10)	48.6	63.2	67.2	74.3	〃
供給の変化(減少)					
(6)	55.1	81.3	80.2	86.0	上げる
(8)	60.7	77.5	77.3	76.5	〃

表4-1より、以下の諸点が指摘できる。

- ・需要の増加においては、(2)(4)の正反応率が比較的高率で推移しているのに対し、(5)(9)のそれは低く、高学年になっても他の項目より低いままである。特に、(9)においては全学年を通じて4割程度であった。
- ・需要の減少においては、低学年より高い正反応率を示すが、その後の伸びが見られない。
- ・供給の増加においては、(7)では低学年より高い正反応率を示し、第5学年でさらなる伸びが見られるのに対し、(10)では第2学年で低いものの第3学年で大きく伸びている。
- ・供給の減少においては、第2学年で6割程度だった正反応率が、第3学年で8割程度まで急上昇し、その後大きく伸びていない。

次に、問3の各質問項目に対する反応と学年との関連性の分析結果は、表4-2の通りである。

表4-2 問3の反応と学年の関連

質問項目	χ^2	df	判定(p)	有意差が見られる学年(p)
需要の変化（増加）				
(2)	12.01	3	.01	4-5年 (.05)
(4)	6.37	3	N. S.	
(5)	24.58	3	.01	2-3年 (.05)
(9)	1.62	3	N. S.	
需要の変化（減少）				
(1)	1.43	3	N. S.	
(3)	7.24	3	N. S.	4-5年 (.05)
供給の変化（増加）				
(7)	23.29	3	.01	4-5年 (.01)
(10)	28.14	3	.01	2-3年 (.01)
供給の変化（減少）				
(6)	58.46	3	.01	2-3年 (.01)
(8)	18.87	3	.01	2-3年 (.01)

表4-2より、以下の諸点が指摘できる。

- ・全体を通じて、10問中4問（1、3、4、9）について、学年との関連性が見られなかった。それらの質問項目は、いずれも需要の変化に関する項目である。また、3-4年で大きく伸びる項目は1つもなかった。
- ・需要の増加では、4問中2問（4、9）で学年との関連が見られなかった。また、隣接学年の比較では、(2)で4-5年に、(5)で2-3年に有意な差が見られた。（何れも有意水準5%）。
- ・需要の減少では、2問とも学年との関連は見られなかった。但し、(3)においては、4-5年間に有意な差が見られた（有意水準5%）。

- 供給の増加では、2問とも有意水準1%で学年との関連が見られた。また、隣接学年比較では、(7)で4-5年に、(10)で2-3年に有意な差が見られた(何れも有意水準1%)。
- 供給の減少では、2問とも有意水準1%で学年との関連が見られ、また2-3年に有意な差が見られた(有意水準1%)。

以上から、本調査で設定した概念的知識は、質問内容によって発達の様相が異なるといえる。すなわち、需要変化に伴う価格決定の間では、低学年より高い正反応率を示すものと低い正反応率のものが見られるが、学年進行による発達があまり見られない。それに対し、供給変化に伴う価格決定の間では学年進行による発達が顕著に見られ、しかも第3学年での発達が著しい。

4.2 分析2の結果

それぞれの知識群の質問項目で代表となる項目の反応を、上述の手続きに従って得点化し、相互の相関係数を算出した。尚、問3での代表項目は、問3(2)(5)(6)(7)(8)(10)の6つである。

表5 知識群相互の反応の相関係数

2年				3年			
	事実	構造	概念	事実	構造	概念	
事実	1	0.017	0.170	事実	1	0.046	0.082
構造		1	-0.036	構造		1	-0.046
概念			1	概念			1
4年				5年			
	事実	構造	概念	事実	構造	概念	
	事実	1	0.155	0.201	事実	1	0.177
構造		1	0.057	構造		1	0.218
概念			1	概念			1
全体							
	事実	構造	概念				
	事実	1	0.167	0.260			
構造		1	0.143				
概念			1				

この結果、各学年とも、また全体においても、3つの知識群相互の相関係数は小さく、相関があるとは言えない。

5 考 察

以上の調査結果に基づいて、それぞれの知識の発達についての特徴を抽出し、併せて社会科学学習の影響を考察してみたい。

5.1 事実に知識

本研究で採り上げた事実に知識、特に経済用語や宣伝内容においては、第3学年児童において著しい発達が見られた。これは、「社会科学習の有無によって大きな差が見られる」という仮説を否定するものではない。それゆえ、これらの知識の発達において、社会科学習の正の影響を認めることができる。

5.2 構造的知識

本研究では、構造的知識は、心理学的研究では小学校高学年に発達するとされるのに対し、質問内容が社会科の学習内容であることから「それよりも早くなる」と仮説を設定して臨んだ。しかし、結果は、この仮説を支持するものではなかった。また、高学年になっても正反応率が低位で推移していたり、逆転現象が生じていたりして、心理学的研究で言われる発達傾向も支持するものではなかった。

では、なぜこのような結果になったのか。質問の内容に立ち返って考察してみたい。

まず、(1)については、子どもは価格決定を経済活動として認知してははず、利益概念を完全に失念していると思われる。この問では、「自分ならいくらで売るか」という質問形式になっており、レモネード販売をビジネスとして認知しない限り、販売価格に利益を組み込むことはない。子どもにとってレモネード売りは、お店ごっこであり、遊びとして認知されたに違いない。従って、生産コスト＝販売価格という図式の価格決定がなされたのであろう。

それに対し、(2)は客観的に八百屋の経済活動を問う形式になっており、子どもにとって八百屋の取り引きはビジネスとして認知されていると考えられる。このような客観的認知では、子どもは八百屋の利益を価格差として求めることができる。しかし、この推論には、仕入価格＋利益＝販売価格といった等式を現実に当てはめる推論能力が必要である。この能力の発達は、心理学的研究の成果で示されるように、高学年まで待たねばならない。従って、この問の正反応率が、第2学年から第4学年までは低く推移する（13.4～25.0％）ものの、第5学年になって急に高まる（46.8％）のだと説明できる。

同じく、(3)も「ジェニーはいくらで売らなければならないか」という客観的な価格決定を問う問題である。しかし、この問は生産コスト（50円）に、除算によって求めた一個当たりの利益（50円）を加えて販売価格を決定するという、より高度な数的処理能力を必要とする問である。その点で、当然高学年ほど有利な問といえる。この問で、高学年児童ほど正反応が少なくなり、一個当たりの利益である50円とする反応が高学年ほど多くなるのは、子どもが除算による数的処理にのみ専念し、仕入価格＋利益＝販売価格という経済的原則を失念してしまったからだと言える。従って、子どもは質問内容の一部の合理的側面にのみ着目し、そこで発見した数的関係をより上位にある経済的關係の中に統合できない部分的な合理的理解にいといるといえる。

このように、構造的知識に関しては、質問形式によって子どもの反応も異なったものになっている。それだけ、彼らの利益概念は曖昧で、流動的なものといえる。ということは、それだけ、社会科学習が利益概念について曖昧なままなされているということになる。

5.3 概念的知識

本研究では、概念的知識は低学年より発達しているものの、「社会科学習の影響により学年進行によって一段と進展する」と考えた。

しかし、結果は、需要変化と供給変化という変化させる条件の種類によって異なったものとなった。つまり、需要変化の場合、質問項目の内で低学年より高い正反応率を示すものが多いが、その後学年による発達があまり見られない。また、供給変化の場合、学年による発達が顕著に見られ、第3学年に大きな発達が見られたのである。

このことから、需要変化の場合の低学年児童の高い正反応率は、上述の先行研究の調査結果を裏付けるものであるが、その後の「一段の進展」が見られるといえない。また、供給変化の場合は、低学年より発達しているとはいえないが、「一段の進展」は第3学年で見られる。

この「一段の進展」が社会科学習によるものだとしたら、今述べたことは次のように言い直せる。すなわち、小学校低学年児童は、需要変化と価格の動きをある程度結合できる段階に達しているにも関わらず、その後の社会科学習で発達促進的な影響を受けていない。一方、供給変化と価格の動きの結合は、低学年では未発達であるが、第3学年の社会科学習によって大きな発達の影響を受けている。従って、小学校の社会科学習は、経済を需要側から見るよりも、供給側から見る点において、発達の影響を発揮していると考えられる。

5.4 3つの知識の関係

本研究は、調査内容である3つの知識に形成的関係を想定し、相互に相関があると仮定した。しかし、結果で示した通り、何れの場合も高い相関は見られず、この仮定は支持されない。あたかも3つの知識は、それぞれ独立に発達しているかのようである。

通常、我々は事実的なものから概念的法的なものへの形成的関係を前提に、社会認識の形成・発展を考えている。本研究の結果は、こうした考えに変更を迫るものともいえる。我々が考える知識の論理的関係は、必ずしも子どもの知識の形成的関係とはいえない。今後、本研究で採り上げた3つの知識の捉え方も含めて、子どもの知識の形成的関係を明らかにする研究が必要である。

6 おわりに

社会科は、子どもの経済システム理解の発達という大きな森の中の1本の木に過ぎない。本研究は、その森の様子を小売業理解という視点からスケッチし、その1本の木が森全体に及ぼす影響を明らかにしようというものであった。しかし、我が国において社会科を学習しない子どもはならず、従ってそのような子どもを統制群とする厳密な調査はできない。こうした方法論上の制約のため、社会科の影響に関する考察は間接的なものにならざるを得ない。この点を踏まえて、本研究の成果を要約すれば、次のようになる。

- 1) 社会科学習は、経済用語・宣伝内容といった事実的知識や供給側から見た価格概念の形成において効果を発揮している。
- 2) しかし、利益概念や需要側からみた価格概念においては、好影響を与えているとはいえず、子どもは経済概念でもって日常の経済活動を統合的に見るところまで行っていない。その意味で、社会科における概念学習が希薄である。

付記：本研究は、平成7年度文部省科学研究費補助金一般研究(C)、研究課種「子どもの社会概念発達に対する社会科授業の有効性の実証的研究」(課題番号：07808028)の研究成果の一部である。また、本研究における調査に際してご協力頂いた長崎市内の4小学校の校長、教頭、教職員の方々、そして児童の皆さんに感謝申し上げます。

文 献

- Berti, A. E. (1992). Acquisition of the profit concept by third-grade children. *Contemporary Educational Psychology*, 17, 293-299.
- Berti, A. E. and Bombi, A. S. (1988). *The child's construction of economics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Berti, A. E., Bombi, A. S. and DeBeni, R. (1986a). Acquiring economic notions:profit. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 15-29.
- Berti, A. E., Bombi, A. S. and DeBeni, R. (1986b). The development of economic notions:single sequence or separate acquisitions? *Journal of Economic Psychology*, 7, 415-424.
- Furth, H. G. (1978). Young children's understanding of society. In H. McGurk (Ed.), *Issues in childhood social development* (pp. 228-256). Cambridge : Cambridge University Press.
- Furth, H. G. (1980). *The World of grown-ups : Children's conceptions of society*. New York : Elsevier. 加藤・北川訳 (1988)。ピアジェ理論と子どもの世界—子どもが理解する大人の世界—。京都：北大路書房。
- Furth, H. G., Baur, M. and Smith, J. E. (1976). Children's conception of social institutions:a Piagetian framework. *Human Development*, 19, 351-374.
- Jahoda, G. (1979). The construction of economic reality by some Glaswegian children. *European Journal of Social Psychology*, 9, 115-127.
- Jahoda, G. (1983). European lag's in the development of an economic concept : a study in Zimbabwe. *British Journal of Developmental Psychology*, 1, 113-120.
- Kourilsky, M. (1973). Economics through fable simulations. *The Elementary School Journal*, 74(3), 149-157.
- Kourilsky, M. (1977). The kinder-economy : A case study of kindergarten pupil's acquisition of economic concepts. *The Elementary School Journal*, 77(3), 182-191.
- Kourilsky, M. and Graff, E. (1985). Children's use of cost-benefit analysis:Developmental or non-existent. (ED261948).
- Ng, S. H. (1983). Children's ideas about the bank and shop profit : developmental stages and the influence of cognitive contrasts and conflict. *Journal of Economic Psychology*, 4, 209-221.
- Schug, M. C. (1983). The development of economic thinking in children and adolescents. *Social Education*, 47(2), 141-145.
- Schug, M. and Birkey, C. J. (1985). The development of children's economic reasoning. *Theory and Research in Social Education*, 13(1), 31-42.
- 福田正弘 (1993)。小学校低学年児童の社会概念発達(2)—小学校低学年児童の経済概念発達調査—。長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 21, 1-19。
- 福田正弘 (1996)。子どもの経済システム理解の発達(1)—子どもの経済制度理解の発達段階—。長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 26, 31-46。

資料1

ちょうさもんたい
調査問巻

しょうがこう ねん ぐみ せと おんな
小学校 年 組 男・女

これは、調査です。学校の成績とは、関係ありません。思ったとおりのことを書いてください。

ジェニーは、レモンをしぼって、砂糖と水を加えて、冷たいレモネード(レモン水)を作って売ることになりました。お店も、自分で作りました。

もんだい1

(1) レモネードを作るレモンと砂糖と水のことを、

なんといいますか。下から、1つだけえらんで、番号に○をしてください。

- 1 製品(せいひん)
- 2 原料(げんりょう)
- 3 道具(どうぐ)

(2) レモンと砂糖と水から、レモネードを作ること

を、なんといいますか。下から、1つだけえらんで、番号に○をしてください。

- 1 生産(せいさん)
- 2 消費(しょうひ)
- 3 投資(とうし)

(3) レモネードを売る値段のことを、なんといいますか。下から、1つだけえらんで、

番号に○をしてください。

- 1 賃金(ちんぎん)
- 2 利子(りし)
- 3 価格(かかく)

これは、きょうどしのはつは、いいとこのレモン。これをしぼって水とさとうをくわるといい、レモネードのできあがり!



(4) ジェニーは、宣伝の旗を作ろうと思いました。旗には、どんなことを書いたらいいですか。上の絵の旗のところに、いいなど思うことを、書いてください。

(5) ジェニーは、どんなところに、お店を出せばいいでしょうか。最もいいなど思うところを、下から1つだけえらんで、番号に○をしてください。また、その理由も書いてください。

- 1 人があまり来ない静かな公園
- 2 お年寄りが多い公園
- 3 子ども連れの家族が多い公園

理由(理由)

ジュニーは、1杯のレモネードを作るのに、レモン1個と砂糖1さじを使います。
レモン1個は40円、砂糖1さじは10円します。水はたです。

もんだい2

(1) レモネードの値段は、自由に決めてかまいません。あなたなら、レモネード1杯をいくらで売りますか。下から、1つだけえらんで、番号に○をしてください。また、その理由も書いてください。

- 1 50円より安(やす)く
- 2 50円
- 3 50円より高(たか)く

理由 _____

(2) ジュニーは、レモンを近くの八百屋から買っています。八百屋は、レモンを農家から買っています。八百屋さんは、農家からいくらでレモンを買っているでしょうか。下から、1つだけえらんで、番号に○をしてください。

- 1 40円より安(やす)く
- 2 40円
- 3 40円より高(たか)く

(3) ジュニーは、1日にレモネードを100杯売って、生活に必要なお金を手に入れます。ジュニーが、1日の生活で、必要なお金は、5000円です。ジュニーは、レモネード1杯を、いくらで売らなければならないでしょうか。

_____ 円

ジュニーは、レモネードの売れ具合を予想したり、自分が買うレモンの値段を見たりしながら、レモネードの値段を変えて売っています。

もんだい3

もし、あなたがジュニーなら、次のようなとき、レモネードの値段をどうしますか。値段を上げるか、下げるか、どちらかに○をしてください。

- (1) 急に、雨が降ってきて、寒くなってきた。 【上げる、下げる】
- (2) 近くでサッカーの大会が開かれて、多くの人が集まっている。 【上げる、下げる】
- (3) 夕方になり、人通りが少なくなってきた。 【上げる、下げる】
- (4) レモンが健康によいと発表され、レモンの人気が高まってきた。 【上げる、下げる】
- (5) となりにパン屋(飲み物は売っていない)ができて、多くの人が買って、近くで食べている。 【上げる、下げる】
- (6) レモンが不作(あまりとれないこと)で、手に入れにくくなった。 【上げる、下げる】
- (7) 近くに、同じレモネード屋ができた。 【上げる、下げる】
- (8) レモンしぼり機がこわれて、手でレモンをしぼらなければならなくなった。 【上げる、下げる】
- (9) 近くにあったジュースの自動販売機が故障して、ジュースを買いにきた人が困っている。 【上げる、下げる】
- (10) レモンが安かったので、たくさん買って、いつもより多くのレモネードを作った。 【上げる、下げる】